

新田義貞の鎌倉進撃路

〔解題〕

新田義貞は群馬県の生品神社で鎌倉幕府討伐の旗揚げをし、埼玉県の小手指原、久米川、東京都の分倍河原、関戸へと兵を進め、相模湾に達し、稲村ヶ崎で剣を海に投じて、現れた干潟を通じて鎌倉に攻めいった。

このことは「太平記」巻十に記されている。生品神社から小手指原までの経路は記されていないが、人々は暗黙のうちに、生品神社から南進し、世良田^{せらだ}あたりで利根川を渡って、深谷あたりを通り、小手指原へ達したと考えていた。

ところが、最近、多くの論者が西進説を唱えるようになった。井田晃作氏と飯倉晴武氏は西進説の唱道者として峰岸純夫氏の名とともに私の父(定方嘉津夫)の名をあげている。^① 実際、嘉津夫は次の四つの文書に西進説を述べている。義貞は生品神社の北で東山道(ぼくいまの県道・足利伊勢崎線)に出て、八幡^{やわた}(高崎市)^②を経由

して鎌倉に向ったというのである。

定方 晟

(1) 『世良田史談会々報』一号(昭和四十六年一月)、二―三頁、二十八号(昭和四十八年五月)、七頁。

(2) 「義貞兵を挙ぐ」『上州路』二十五号(昭和五十一年六月号)、あさを社(高崎市)

(3) 新田義貞公挙兵六百五十年記念「太平記の里づくりシンポジウム」記録(東毛広域市町村圏振興整備組合主催、昭和五十八年五月七日、於新田町社会体育館)

(4) 「義貞公の進撃路」『金色世界』五十九、六十、六十一号(定方嘉津夫発刊、昭和五十九年四、五、六月)

しかし、井田氏も飯倉氏も(2)あるいは(3)に言及するのみで、(1)(4)には言及していない。(1)(4)は両氏の目に触れ

ていないらしいが、当然かも知れない。『世良田史談会々報』も『金色世界』も規模の小さな地方的出版物（月刊）である。前者は世良田村の有志十五名の参加で始まった郷土史研究会の会報であり、後者は嘉津夫の私的刊行物であった。ともに嘉津夫が編集し、初期には手書きガリ版ずりで、のちには簡易活版印刷機で紙面を作成し、数枚をホチキスで止めた簡素なもので、紙面はしばしば汚れていて読みにくかった。嘉津夫はこれらを遠方の知人にも郵便で送っていたが、配布先は限られており、(1)(4)が人に知られなかったのは止むをえなかった。

しかし、(2)と(3)が西進説を唱えるだけで論証を欠いているのに対し、(4)は論証を目的に書かれている。西進説を理解してもらうためには(4)の紹介が必要である。西進説については専門学者によっても十分な論証がおこなわれていないので、この紹介には意義がある。その議論には地元の研究者でなくては容易に知りえない知識も含まれており、この点からも意義がある。

嘉津夫が西進説を構想するようになったきっかけの一つに吉田東伍氏の東山道への言及がある。しかし、氏は義貞が東山道の路頭に陣したのは東山道の駅舎を奪うのが目的だったと考えたらしく、そこから八幡へのルートには言及しなかった。⁽³⁾ 嘉津夫は生品神社——東山道——八幡のルートを考証することによって自分の説を西進説と呼ぶことにしたのであろう。

嘉津夫が八幡（太平記では小幡）の地名を知ったのは神田本太平記によってであった。この地名は太平記諸本の中でも古態本にあって、流布本にない。たとえば、次のようである。

◎古態本

◆玄玖本太平記(二)、勉誠社、昭和四十九年

「五千餘騎小幡庄ニテ追付奉ル是偏ニ八幡大菩薩ノ擁護ニ依レル者也暫モ不可逗留トテ同九日武蔵野エ打越ヘ給フ處ニ」

（神宮徴古館本太平記、和泉書院、一九九四、および神田本太平記、国書刊行会、明治四十年も右にほぼ同じ）

◆西源院本太平記、刀江書院、昭和十一年

「五千餘騎ニテ小幡庄マテ追付奉ル是偏ニ（以下、右に同じ）」

◆中京大学図書館蔵太平記一、新典社、平成二年

「五千餘騎小幡庄ニテ馳加ル是偏ニ（「同九日」なし）」

◎流布本

◆義輝本太平記(二)、勉誠社、昭和五十六年

「五千餘騎⁽⁴⁾修敷見ヘテ馳来ル義貞義助諸トモ不斜悦テ且クモ逗留スヘカラストテ同九日武蔵国ヘ打越給フニ」

（梵舜本太平記(三)、古典文庫、昭和四十年、および土井本太平記、勉誠社、本文篇上、一九九七、も右に同じ）

神田本は古態本の一つであり、「小幡庄」の文字をもつ。神田本は明治四十年に出版されたが、それ以外の古態本、たとえば西源院本などはそれ以前から学者には知られていた。しかし在野の研究者である嘉津夫は神田本によって初めて古態本に接することになったようである。

ところで十四世紀頃成立の年代記「神明鏡」には太平記の「小幡」に相当する箇所「八幡」の文字がある（改訂史籍集覧第二冊、復刻版、臨川書店、昭和五十八年、八十三頁）。小幡と八幡はどち

らが正しいのか。地図を見ると、高崎附近に八幡があり、甘楽郡に小幡がある。地理的な条件からいうと、八幡のほうに分がある。なぜならこれは長野県から碓井峠を経て群馬県を東西に横断する東山道と、新潟県から群馬県を南北に横断して南関東へ抜ける道路の交差点に位置し、各方面から新田軍が集結するのに便利な場所だからである。(高崎駅は今でも信越線と上越線の分岐点であり、東方では前橋駅を介して両毛線につながる。)

小幡は南関東へ抜ける道路からは少し西へ入った位置にある。小幡も内山峠を経て長野県の佐久に通じるが、このルートは東山道ほどには便利ではないようである。小幡は八幡の誤りであろうか。

(発音上も、文字上も、両者は紛れやすい。)

専門家は早くから古態本によって小幡(八幡)庄の記事に接していたはずである。それにもかかわらず、南進説(南下説)に何の異も唱えなかったのは、⁽⁵⁾地元の人間のように(嘉津夫は世良田で生まれ育った)この問題に切実な関心を持たなかったからであろうか。嘉津夫は義貞の館は世良田にあったと考える。したがって、義貞が鎌倉へ討って出るのに、なぜ世良田の二里も北にある生品神社へ行って旗あげしたかを説明することがかれの課題であった。⁽⁶⁾

嘉津夫の論文(4)の紹介にあたっては、誤植をただし、達意を図るために文章の修正をおこなった。論旨には一点の変更も加えなかった。必要に応じて注を加えた。

「本論」

義貞軍の進撃路

定方 嘉津夫

1 南下説

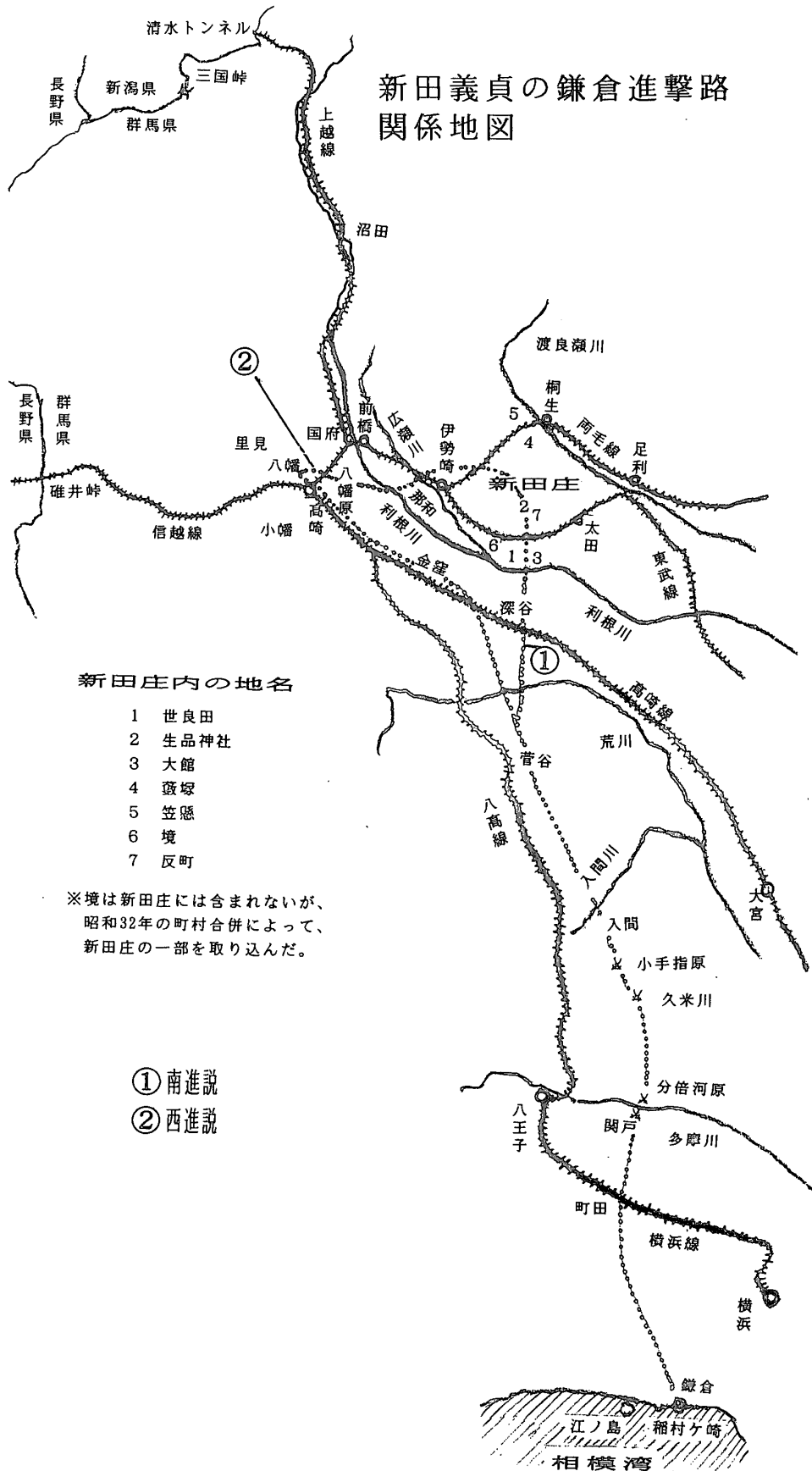
元弘三年五月八日、新田義貞が生品社前に旗を挙げ、鎌倉として攻め上ったということはあまねく人の知るところである。

これは太平記に明記するところで、他にこれを否定するような資料も今のところは見あたらないので、素直にこれを信ずるほかはないであろう。

しかし太平記には、五月八日の卯の刻——午前六時頃——兵を挙げてから、その日の夕方、利根川の手前で越後の軍勢と合流し、翌九日、武蔵の国に攻め入るまでの義貞軍の行動については、なにも一つ記すところがない。その空白を埋めるものは、臆測以外になにもない。

したがって、義貞軍が生品神社からどんな道すじを通って進んだか、またどこで利根川を渡ったかということについてはいろいろな説をなすものがある。がだいたい一致しているのは南下説である。即ち生品神社から新田の庄内を南下し、新田の庄の南限で利根川を渡り、今の深谷市のあたりを通過して、小手指原・久米川方面に向かったというのである。ではいったいどの道を進んだのか、どこで川

新田義貞の鎌倉進撃路 関係地図



を渡ったのかということになると諸説は紛々として帰するところを知らない。

佐波郡境町大字北米岡に姥石または甘酒婆さんといわれる石がある。鎌倉攻めの義貞軍がここを通過した時、その軍勢に甘酒を振舞っていた老婆が、あやまって大館宗氏の馬に蹴られて死んだ。石はその老婆の墓であるという（世良田村旧蹟案内）。あかがね街道が早川を越える薬師橋の北詰に「新田義貞物見の松」という松の老木があつた（明治末年枯死）。義貞がこの木に登って敵状を偵察したとされる（同上書）。尾島小学校の西、出塚徳川に通ずる道の北に「義貞舟繋ぎの松」とか「義貞駒繋ぎの松」とか呼ばれる松がある。義貞が利根川を越す時、この松に舟を繋ぐか馬を繋ぐかしたのだという。

姥石というのは母子の別離などの伝説にまつわる石で、全国にある。「義貞物見の松」は江戸時代の明細帳には「栄朝禅師御手植えの松」となっている。「菊は栄えて葵は枯れる」明治になって義貞株が上昇したとき、従来の古蹟が義貞にちなんで改名させられたのであろう。

2 南下説への疑問

私はかねてからこの南下説に腑に落ちないものを感じていた。それはこういうことである。

太平記には、挙兵に馳せ参じた一族として大館、堀口、岩松、江田、脇屋、里見、桃井などの諸氏が挙げられている。大館も堀口も岩松も江田も生品神社からは南八キロ内外のところにある。生品神

社に近いのは脇屋氏だけである。里見、桃井は西上州の方であるからおそらくその前日あたりに新田の庄へかけつけていたのであろう。なぜ南の方の人々がわざわざ二里も北に集結し、またわざわざ同じ道を二里も引き返したのであろうか。

この疑問を抱いたのは何も私だけではない。毛呂権蔵はその著『上野国志』『生品神社』のくだりで「孤虚旺相の方によるものか」——即ち吉い方角を選んだのではないかといっている。⑧
 えは、今の人は一笑に付すかも知れないが、歴史を考える場合、無視することはできない。

孤虚旺相というのは日の吉凶、方位の吉凶をいう。兵法家の用いる吉凶の論である。「天の時」は地の利に若かず。地の利は人の和に若かず」ということばがある。われわれ現代人は「天の時」とは天象気象のこと、「地の利」とは土地の形勢のことと解釈するが、兵法家は「天の時」とは支干孤虚旺相の属をいう（風后孤虚）——といってこれを日の吉凶、方の吉凶とする。方角を子丑寅の十二支に分け、孤虚の方は凶とする。旺相は木火土金水という五行の盛んに活動する方角でこれを吉とする。要するに吉方即ち恵方を選んだのではないかと毛呂権蔵はいうのである。武將の持つ軍配団扇には日月星辰や方位などが書かれていたほどであるから、そういうこともあり得たであろう。しかし実際の戦記文学などを読んで見ても、そのために行動を束縛されたようなことはなかったようである。もし方角を選ぶことがあったとしても、それはそれを選ぶ余裕がある場合——自分から戦争をしかける場合——のことで、敵が攻撃してきた場合は、そんなことをいっている余裕はなかったであろう。私は陰陽道については何も知らない。吉田東伍博士が地名辞書の中で方位説を

否定しているので、これに雷同しているに過ぎない。

毛呂権蔵はさらにいう。「又土人の説に義貞平日の居館は世良田にありといえども、反町に要害の地を取りて城を築きてここに在ます、反町は元は一の井の郷の内なれば、其地の鎮守の前にて旗を挙げ玉ふなるべし。この説誠にさもあるべし」。しかし往時の文書にこの説が全く現われないのはどういうわけであろうか。

義貞は幕府の命でついていた戦線から離脱して河内から上野に帰り、ひそかに倒幕の準備を進めていた。そんなこととは知らない北条氏は二人の使者を世良田へ送り、六万貫の金を五日の間に調達せよと世良田の住民に強要した。世良田には有徳の者——金持ち——が多いことは鎌倉にまで聞こえていたのである。義貞はこれに激怒した。「わが館のほとりを雑人の馬の蹄にかけさせつること無念なれ。いかでか見ながらこらゆべき」といって、二人を捕らえ、一人は監禁し、一人は斬首してその日の夕方に世良田の里に晒した。太平記のこの文を読む限り、義貞が反町にいたような気配は全く感じられない。

義貞の時代は切り取り勝手な無政府状態ではまだなかった。まがりなりにも法治国家だった。頼朝が幕府を開いてから高時に至る約一四〇年の間、少くとも東国においては武力による庄園の侵略は許されなかった。どうして要害などを造る必要があるか。それに反町が自然の要害であるとは考えられない。室町幕府が統制力を失い、実力が物をいう世になった文明元年に岩松家純が金山に城を築いたのと同様に、金山城の支城として築城されたのが反町城だと私は思っている。

3 東山道路頭説

吉田東伍博士は方位説も反町説も斥けて「東山道の路頭に陣するのみ」と簡単に片付けているが、これについていささか考えてみたい。

東山道というのは東山道諸国（時代によって変遷はあるが近江、美濃、飛驒、上野、下野、陸奥）の国府をつなぐ官道である。上野国内では国府に近い群馬や、伊勢崎市の北方にあったといわれる佐位という駅を通って下野の国府に通じていた施設である。

東山道などという道路は、国府がまだ機能していた頃にはあったが、義貞の頃にはなかったという人もいるが、道路というものは、それを建設した目的がなくなったからといって、簡単に消滅するものではない。例幣使が廃止されても、例幣使道は残り、今でも盛んに利用されている。銅の輸送がなくなっても、あかがね街道は依然として残っている。

また義貞の頃には国府などはなかったと考えるのも早計である。国府が完全に政治的機能を失ったのは室町時代に入ってからで、義貞の頃の地方行政は、朝廷を任命権者とする国司と、幕府を任命権者とする守護との二重支配組織だった。後醍醐天皇の政治改革の目的はこの二元政治を廃止して、国司による一元政治に復帰することにあった。一国の中心である国府またはその周辺には、国司と守護が対立しながら共同していたのである。

4 西進説

前にも述べた通り、太平記には五月八日の朝の六時から翌九日までの義貞軍の行動についてはなにも記すところがない。私はもともと、太平記はこの間の記事を欠いているのだとばかり思っていた。

私は終戦までは東京に住んでいた。そして神田の古本屋へ出かけては古本をあさっていた。ある時私は一冊の本の前で足をとめた。それは神田本太平記という本であった。

印刷術の発達していなかった昔は本は筆写によって伝播したのである。したがってその間には誤写することもあり、故意に書き入れることもあり、削除することもある。それ故に諸本をくらべると、大筋においては一致していても、細かい点になると、かなりの相違がある。太平記のよく知られている版本には西源院本、北条本、南都本、金勝寺本、毛利本などがある。しかし私は神田本という本があることは知らなかった。私は狂喜してその本を購入した。

水戸の彰考館では、太平記の諸本を比較検討して、その相違点を細字で書き入れた本を作った。これを参考太平記という。その中に神田本太平記は入っていない。彰考館ではこの本の存在を知らなかったのかも知れない。

この本は元老院議員、男爵神田孝平^{たかひら}が発見した本である。この人は私たちが中学校で使った英語の教科書カンダス・クラウン・リーダースの著者である神田乃武^{なりぶ}の養父である。そんな関係から私はこの本に親近感を覚えたのかも知れない。

この本は太平記の諸本の中で一番古い本だと出版者は紹介してい

るが、確かに文章は素朴で簡潔である。ほかの本と比べると脱漏も多く錯簡も多い。巻子本^{かんす}——巻物——は紙を糊で張り合わせて作るが、時が経つと糊がきかなくなつてバラバラになつてしまう。それを再び張り合わせる時よく内容を検討して張らないと順序が狂つてしまう。この本にもそんな理由で文章が続かなくなるところがあちこちにあるのである。

さてこの本を見ると、かねてから私の疑問としていた五月八日の義貞軍の行動に関する記述がちゃんとある。義貞軍が東山道を西に進んで⁹国府にいた長崎某を追い払い、小幡の庄で越後、信濃、甲斐などの軍勢と合流して武蔵の国に攻め入ったとはつきり書いてあるのである。

この本を私は大切にしていたが、教員をしていた私は子どもたちの集団疎開について長野県へ行かなければならなかったので、蔵書は一切学校へあずけて出発した。一年半にわたる山の中の生活から解放されて学校へ帰ってみると本は一冊もない。児童の留守に学校に駐在した兵隊たちがストープの中にくべてしまったのである。その後再び手に入れたいと思つて探してみたが、今に至るまで発見することはできない。

しかし、これに似た記事はほかの本にはあるのである。梅松論という本と神明鏡という本である。しかしこの記事はあまり問題にされなかった。流布品の太平記にそうした記事がないことと、鎌倉へ進むのに西の方へ向かうというのが人々に奇異の感を与えることのためではないかと私はひそかに考えているのである。梅松論には次のように書いてある。

しかる間（義貞が兵を挙げたので）当国守護長崎孫四郎左衛門尉、即時に馳せ向かって合戦に及ぶといえども、既に上野の輩残らず義貞に属するにこそ、相支うるに及ばずひき退く間、義貞多数を引率して武蔵国に攻め入る。

神明鏡には

五月五日、新田小太郎義貞義助の一族三十余人宣旨を三度拝し、笠懸の野辺打出其勢わずかに百五十余には過ぎざりけり。越後等馳来る。その日二千余騎になる。甲斐信濃源氏五千余騎にて八幡庄にて馳せつく

参考太平記の割註によると流布本太平記の「越後勢と合流し、一休みしている時、後陣の越後勢と甲斐信濃の源氏五千余騎が夥しく馳せ来たったので義貞兄弟が大いに喜んだ」という「夥しく馳せ来る」という文が、今川本やその他のいくつかの本には、「小幡の庄にて追い付き奉る」という文になっているという。神田本以外にも小幡の地名を記す太平記があるわけである。こう見て来ると、八幡か小幡かは別に考えるとして、これらの地名を記す句のある文がもとの形で、後にこの句が脱落したのではないかと思われるのではない。

こうして流布本の太平記には現われなかった八幡（小幡）と守護が登場したわけであるが、これではまだ証拠は十分だというわけにはいかない。この程度の証拠では到底公判を維持することはできない。もっとも証拠を集め、傍証を固めなければならぬ。

「お前はあちこちから都合のよい資料ばかり集めて論理を組立てているが、そんなのは問題にならん」といわれたが、そういうことの

ないように十分注意するつもりである。太平記の異本にいう小幡庄も神明鏡にいう八幡庄も西上州にあることは間違いない。それに梅松論にいう守護が加わると、どうも西進説を主張してみたくなるのである。

5 国中ということ

太平記によれば、使者を斬ったために義貞の反意が幕府に知れ、幕府は上野武蔵の軍勢に義貞討伐の命令を下した。義貞は直ちに一族を集めて戦術会議を開いた。ある人は沼田の要害にこもって利根川を防禦線にして敵を待つべしと出張した。ある人は越後には新田の同族が充満しているから、越後の津張郡（こがり）へうち越えて、上田山を切りふさぎ、軍勢を集めて防ぐべしと主張し、衆議はなかなか決しなかった。すると弟脇屋義助はそうした消極論を斥けて

おのおの宣旨を額に当て運命を天に任かせて、ただ一騎なりとも国中に打ち出でて義兵を挙げたらんに、勢付きなばやがて鎌倉を攻め落すべし。勢付かずばただ鎌倉を枕にして討死するより外の事やあるべき

といった。その座にいた一族三十余人はみなこれに賛成し、さらば事の漏れぬうちに打ち立てといて兵を挙げたとある。

この義助のことに私ははじめ首を傾げ続けていた。百五十騎の軍勢が国中に打って出ていったいどうする気なのであろうか。まるで一握の砂を大海に投げこむようなものではないか。軍隊というも

のは集団を組んでいるからこそ威力を発揮することができる。各個撃破を受ければ、いかに人数が多くても何の役にも立たない。これより後の話であるが、義貞軍が極楽寺の切通しで苦戦したのは、そこが狭くて大軍を移動させることができず、そのために各個撃破にあつたからである。いかに平和が続いて実戦の経験がないとはいえ、いやしくも武士たるものが、そのくらいのことを知らないはずはあまるまい。これが私の長い間の疑問だつた。

しかしこの疑問もやがて解決の曙光を仰ぐ日が来た。私は「国中」ということばが「国中の兵を集める」などという時の国中とは意味が違うのだということに気がついた。ここに用いられている国中は「くになか」もしくは「くんなか」と読んで、国の中心部をさすことばであることに気がついた。

佐渡の国府は大佐渡小佐渡山脈にはさまれた狭い平野にある。この平野を国中平野という。甲斐の国の国府は文字通り甲府にあつたが、この盆地も国中平野という。駿河の国の国府は駿府（今の静岡市）にあり、ここを流れる安倍川の流域一帯が国中と呼ばれたのである。

また柏書房発行の日本史用語大辞典に「国中 くんなか 国の中央部をいう」とある。残念ながらその出典については触れていない。太平記の中には国中ということばは何回もでてくる。太平記には仮名がふつてないが、「くにじゅう」と読んだ方が意味が通ずる場合と、「くになか」と読んだ方が意味が通ずる場合の二つがあるようである。国中と国府とを同じような意味に使っている場合があるようにさえ思われる。

前橋高崎付近は今でも県政の中心地帯である。そこを制するもの

がその国を制するのである。だから平将門はまず下野の国府を制し、次に上野の国府を制したのである。そればかりではない。この地帯は越後、信濃から鎌倉へ通ずる交通路の要衝である。ここを抑えられと、鎌倉は信越両国との交通を断たれるのである。鎌倉幕府がこの地を空白状態にしておくはずはない。義貞は前門の虎にばかり気を奪われていると後門の狼に尻を噛まれる恐れがある。義貞としては当然守護に対する策を立てなければならぬ。

6 守護対策

新田氏は出陣する時、館その他の建物を焼き払って、再び帰る意志のないことを表明したと説く人がある。そんなことがあるはずはない。平家物語によると、平家が源氏に攻められて都を落ちて福原へ移る時、六波羅の邸宅を焼き払ったというが、それとこれとは事情が違うのである。平家の場合一族を挙げて、女子供老人まで都を引き払った。六波羅はあき屋敷になるのである。しかし義貞の軍勢の中には女子供老人はいない。当然土地にとどまって生活する人がいるはずである。義貞は出陣するに当って、まずかれらを保護する対策を講じておかなければならなかった。

守護は頼朝が勅許を受けて各国に設置した地方官で、国司からその国の軍事警察権を委譲されたものである。守護の役目は大犯三箇条といつて、大番催促、謀反人および殺害人の検断であつた。義貞が兵を挙げれば、守護がこの謀反人を黙って見過ごすはずはない。新田の庄が守護の襲撃にさらされることは、当然予想されることである。義貞はまずこの後門の狼の牙を抜いておかなければならない。

また上信越の交通の要衝を守護に抑えられては、新田諸軍団の連絡の妨げになる。結局、守護は義貞が一戦を交えなければならぬ相手である。

五月十日、北条高時は、一族の金沢貞将に五万余騎を差し添えて下河辺方面^{しもへべ}へ向かわせた。下河辺は今の古河市（茨城県）の南、栗橋（埼玉県）を含む一帯にあたる。この道を下の道というが、上総下総の兵を集めて、新田軍の背後に廻って、背面から攻撃するようにさせたのである。しかしこの軍勢は十七日頃、千葉氏や小山氏などに負けて鎌倉へ逃げ帰った。おそらく義貞と千葉小山氏のあいだには約諾ができていたのであろう。戦争に出かけるからにはまず後顧の憂えを断っておかなければならない。

7 上野守護

梅松論には上野の守護長崎孫四郎左衛門尉が義貞の拳兵を知って即座に鎮庄に赴いて一戦に及んだが、支えることができないで退いたとある。

上野の国の守護は北条貞時の時までは安達泰盛が任ぜられていた。泰盛は鎌倉將軍家の直臣である御家人の利益を代表する人物だった。北条氏も身分の上では御家人であつたので、大きな権力はもっている。他の御家人と同列であつた。一方北条氏自身の家来は御内人^{みうちびと}といつて、將軍からいえば陪臣（家来の家来）ではあるが、北条氏が有力御家人を次々と亡ぼし、群を抜いた権力を掌握すると、御内人の権力も増大した。その御内人の利益を代表する人物に平頼綱（長崎頼綱）がいた。弘安八年十一月、頼綱は泰盛を不意討ちによ

って殺してしまった。この戦いで上野武蔵の御家人が泰盛の与党として五百余人も殺された。足利氏の一族足利上総三郎もこの戦いにまき込まれた。これを霜月の乱という。乱の結果、上野の守護職は長崎氏の手に帰してしまった。頼綱は内管領^{うちかんれい}として専横を極めたため、貞時に亡ぼされた。しかし、内管領の職は頼綱の甥高綱や高綱の子高資に受け継がれ、長崎氏は依然として権力を振るつた。

梅松論には守護長崎孫四郎左衛門尉とあるが、この有力な御内人が、自ら守護になって地方に下るはずはない。「守護」はおそらく「守護代」の誤りであろうと私は思っていた。しかし太平記には五月十日、金沢貞将を下の道へ遣わすとともに、桜田貞国を大将として、長崎二郎高重（高資の子）、同孫四郎左衛門たちに六万余騎を与えて上路より入間川へ向かわせたとある。梅松論にいう孫四郎左衛門尉と太平記にいう孫四郎左衛門とは果して同一人であろうか。同一人とすれば、八日に上野で敗れ十日に鎌倉から出撃したことになるが、とても人間わざではない。もともと神明鏡には義貞は五月五日に兵を挙げたとしているから、それだと不可能ではない。しかし単にそれだけの理由で八日説を斥けて五日説をとるわけにもいかない。ここでは疑問のままにして先を急ぐほかはない。

8 八幡の庄

高崎駅から信越線に乗るとすぐ着くのが「ぐんまやわた」という駅である。八幡の庄とはこの周辺をいつたらしい。ここに庄園があったことは、義貞拳兵から三十年ほど後の貞治三年の円覚寺正統院文書に「上野国八幡庄」とあるから間違いはあるまい。¹⁰なおここに

は八幡宮がある。社伝をそのまま信ずるわけにはいかないが、天徳年間（九五七―九六一）の勸請というから、義貞挙兵の頃には存在したであろう。想像を逞しうすれば生品社前は新田一門の結団式の場、八幡は源氏諸軍団連合軍の結団式の場という意味があつたのではあるまいか。

小幡説も無視はできないが上信越甲諸国の軍勢の合流点としてはやや西に偏しているように考えられる。

9 南進西進両論の根拠

では南下説と西進説の根拠を検証してみたい。

太平記の毛利本、西源院本などは「後陣の越後勢、甲斐信濃の源氏等五千余騎は小幡の庄にて追付き奉る」といい、神明鏡は西上州の八幡の庄に集結したといっている。小幡も八幡もともに西上州である。だからこれらは西進説にひとつの根拠を与えてくれると考えてもさし支えはあるまい。

また梅松論には、義貞の挙兵を知った「当国の守護長崎孫四郎左衛門之尉、即時に馳せ向かつて合戦に及ぶといえども既に上野の輩残らず義貞に属するにこそ、相支うるに及ばずひき退く」という。守護は国府附近に駐在するのが普通であるから、これも西進説を裏付ける一史料とみてさし支えはないであろう。特に上野の場合、国府附近は信越から鎌倉への通路を扼する重要地点であるから、ここにおいて守護の駐在すべき場所があるとは考えられない。

ただし、正平六年（一三五―一三六）、長尾孫六と長尾平三が上野の国警護のために世良田にいたと太平記に記されている。しかし、守護

としていたのではなからう。当時上野の守護は上杉憲顕で長尾氏はその被官であるから守護代としていたのであろう。この年は新田義宗、義興、脇屋義治などが足利氏と激戦を展開した武蔵野合戦の前年であるから、孫六らはその策源地である世良田を見張るために臨時に駐在したのであろう。

梅松論には長崎孫四郎左衛門尉を守護と書いてあるがこれは守護代の誤りであろう。長崎氏は北条氏の御内人（直臣）として権勢を振るっていたので、当主自らが鎌倉を留守にするということは考えにくいからである。

話が脇道にそれてしまったが、それでは南下説にはどんな史料の裏付けがあるのであろうか。私は寡聞にして信頼すべき史料を知らない。これは私の邪推かも知れないが、南下説を唱える人は現代人の常識を根拠にしているのではないかと思われる。鎌倉は生品神社から見れば南方にあたる。その鎌倉へ向って進発するのであるから南へ向かつて足を踏み出したと考えるべきだと。

が歴史を考察するに当って現代人の常識がどれほどの力を持ち得るであろうか。いま私たちは京都へ行くためにその反対の方向、すなわち東に向かってあゆみ出す。東京へいって新幹線を利用するからである。

木曾義仲は京都へ攻める時最短距離である東山道を通らず、北陸道を迂回した。皇女和宮が東下する時には東海道を通らず、遠くて不便な中山道を通った。当時の事情を知らずに、現代人の常識のみで考えると、かれらの行路選択は愚行にしか見えない。

足利尊氏と弟の直義は京都で決定的な対立関係に陥ってしまった。直義は京都を脱出して鎌倉へ赴き、そこを根拠地にして兄と一戦を

交えるつもりだった。その時直義が通ったのは、東海道でも東山道でもなく、実に北陸道だった。当時の北陸道の守護は若狭が山名時氏、越前が斯波高経、越中が桃井直常、越後上野が上杉憲顕というように直義党の勢力で占められていたからである。これに對して、尊氏が直義討伐のために鎌倉に向かうのに利用した道は東海道であった。東海道筋には尊氏の与党が多かったからである。

この時関東の武士たちも兩派に分かれて戦った。尊氏方の宇都宮氏綱が、駿河の国（静岡県）の薩埵峠で尊氏と合流するためにとつた道は佐野（栃木県）から新田の庄の北辺を通過して利根川を越え那和の庄に出る道であった。氏綱はここでその進撃を妨げようとする直義党の桃井直常らと激戦を展開し、これを破って薩埵峠に到着したのであるが、今の常識から見れば、「利根川を越えて那和の庄へ出る」などということは考えられないだろう。那和は今の佐波郡西部の旧名であり、利根川の左岸（東側）に位置しているからである。しかし、広瀬川から見れば、その右岸（西側）にあり、この広瀬川こそ当時の利根川の川筋だったのである。¹²

10 上越の交通

私は西上州合流説において越後勢の上州入りは上越国境經由であるとのべた。ある人がこれを批判して「当時は上越直接の交通はなく、信州を經由して往来していた」といったそうである。かりに上越間に直接の交通がなかったとしても、西上州合流説そのものを妨げることにはならないが、上越直接の交通の有無については一言弁ぜざるを得ない。

上越国境の交通路がいつ開けたか私は知らない。がそれについて私が知る最も古い記録は源平盛衰記と長門本平家物語である。

治承四年（一一八〇）木曾義仲が反平氏の兵を挙げて信州の依田城に拠った。平家方の越後の豪族城資永が義仲の討伐に向かった。その時資永は兵を三つに分け、一手は上田越え、一手は筑摩越え、一手は関山越えで進撃させた。¹³この上田越えというのが上越国境の三国峠を越える道なのである。この上田は信州の上田ではない。越後の国、南魚沼郡六日町付近一帯を上田といい、そこにある上田山は三国越えの要衝を扼する重要な軍事拠点だったのである。つまり資永軍の一部は三国峠を越えて上州に出、碓井峠を越えて信州に出て、信州上田市の南にある依田城を襲おうとしたのである。

信越線の開通が明治二十六年であり、上越線の開通が昭和六年であることから考えて上信越ルートが上越ルートより早く開けたと考えることは首肯できるが、義貞挙兵の頃交通がなかったなどということは到底考えられない。

その何よりの証拠は、義貞挙兵の時、弟脇屋義助のいったことばの前に、他の人から出された二つの提案である。一つは「越後の国には大略当家の一族充ち満ちたれば、津張郡へ打ち超えて、上田山を伐り塞ぎ、勢をつけてや防ぐべき」というのであった。津張郡というのは正式な郡名ではないが、当中魚沼郡一帯をそう呼んでいたのである。上越国境に交通路がなかったとしたら、そんな提案が出るはずはない。

事実その辺一帯には、大井田、中条、里見、鳥山、田中、羽川などという新田一族が繁衍していたのである。長楽寺（世良田）の寺領なども何か所かあったのである。この人々と新田の人々とは、は

たして信州經由で往来したのであろうか。越後でも北西の方の人々なら信州を經由してもそう遠回りにはならない。南越後の人々の場合は、信州經由で直線距離にして二一〇キロ、三国越えて一三〇キロ、その差は八〇キロ、里数にして二十里もある。

もう一つの提案はこうであった。「沼田の庄を要害にして利根川を前に当てて敵を待たん。」これについては次項で改めて考えてみるが、ここで付け加えておきたい事がある。正平七年（一三五二）の武蔵野の合戦の時、戦い敗れた新田義宗、義興、脇屋義治は味方の軍勢が無断で戦線を離脱し、故郷へ帰っていくのを阻止しようとして、信濃路と裁田山うたやまに関を築いたということが大平記巻三十一にあるが、この裁田山というのが、三国越えの上田山なのである。

11 沼田の軍事

「沼田を要害にして敵を待つ」というが、もし後方越後との交通ができないとしたら、こんな拙劣な戦法はあるまい。自分で自分を雪隠詰せうこんづめにするようなものである。ここを要害にするということは、越後からの食糧兵器、軍勢などの補給が期待できるからで、そのためには越後との交通路がなければならぬ。

この提案の中で、不思議でならないのは「利根川を前に当てて敵を待つ」ということばである。利根川は沼田の西を流れ、沼田の南でやや東に折れ、再びほぼ南へ流れる。もし鎌倉軍が武蔵野の中央を横断し、上野の国の東南部で利根川を越え、沼田を攻撃するとすれば、鎌倉軍も新田軍ともに利根川の左岸に位置することになる。そうなったら利根川は防禦線として何の役にも立たないことになる。

私もこれについてはいろいろ考えてみたが、こんなふうに考えてはどんなものであろうか。

当時の武蔵野は今とは違って未墾の原野に覆われていて、大軍が移動できるような交通路は開けていなかった。むしろ秩父山地の東の麓の方が先進地帯である。交通路も開けていた。しかも、政治的軍事的に重要な意味を持つ国中くになかつが利根川の西にあるとすれば、新田軍が予想する鎌倉軍の進攻路は当然、利根川の右岸でなければならぬ。

12 計画と実戦

ある人はこう私に反論した。「作戦計画と実戦とは違う。国中に討出るといふのは脇屋義助が立てた作戦計画に過ぎない。作戦がその通りに行われたという保証はどこにもない。」もつともである。作戦通り戦争が進めば戦争に負ける者はない。

しかしこの計画を立て、採用した人々が、西進の意志は持っていたが、南下の意志は持っていなかったことだけは確かである。もしこの計画が何らかの事情によって変更されたとすれば、太平記はその事実を書くべきである。もし書かなければ、太平記の記述は不完全といわなければならない。すべての文章に完全性を求めることはできないから、この欠如をもって「これが証拠だ」と大上段にふりかざすわけにもいかなないのも確かである。しかし神明鏡その他の記載と照合してみると、この計画は実行され、ある程度成功したと考えられるのである。したがって右の反論だけでは私はまだ西進説の旗をおろそうとは思わない。

がよくよく考えてみれば、反論者の存在は有難いものである。反論者がいなかったら、これだけ考えることは到底できなかったであろう。また反論者によって私の論拠が砕かれても、私は恨まない。真実の発見とともに手を取って喜ぼうと思う。

13 越後勢の合流

五月八日午前六時、生品社前に旗を挙げてから、その日の夕方、利根川の対岸からやって来る越後の援軍を迎えるまでの義貞軍の行動については、流布本太平記には何ら記すところがない。

「その間いつたい何をしていたんだ。まさか昼寝をしていたわけでもあるまい」と私がいうと、ある人は「出陣式というのは一種のセレモニーのようなものだ。式が終ったからといって直ちに行動を起こさなければならぬというものでもない」といった。なるほどオリンピック選手の結団式などはそうである。結団式が終わったからといってすぐ競技に入るわけではない。日本の歴史にもそのような出陣式がなかったとはいえないかもしれない。が義貞の挙兵は果たしてそんな悠長なものであり得たであろうか。太平記には「さらばやがて（直ちに）事の漏れ聞えぬ前に打ち立て」ということで急いで兵を挙げたとある。さもあるべしと私も思うのである。「先んずれば人を制す、後るれば人に制せらる」である。またそんなのんびりした出陣式なら、何も朝早く、あかつきの闇について行く必要もないだろう。

神田本太平記には小幡（八幡）へ向ったらしい様子が記されているが、さらにその行動記録の空白を埋める格好な史料が梅松論の記

事である。重複するが、もう一度、挙げてみると「しかる間当国の守護長崎孫四郎左衛門尉、即時に馳向て合戦に及といへども、すでに上野の輩残らず義貞に属するにこそ、あひ支うるに及ばず引き退く」とあつて八日は昼寝どころか戦闘が行われていたのである。生品社前の出陣式は決して単なるセレモニーではなかったのである。では戦場はどこだったのだろうか。南下説に従えば、戦場は新田の庄内ということになる。その場合、新田氏の妻子や老人、多数の庄民がその戦争にまきこまれて、家を焼かれたり、殺されたり傷つけられたりすることになる。義貞はそんなことも予測できない愚かな武将だったのだろうか。こんな場合、誰でもまず最初に考えることはいわゆる「銃後の護り」である。

そこで私が戦場として想定するのは、まず笠懸野であり、次に今の伊勢崎付近から東の東山道沿線である。なぜというに、当時、利根川は那和合戦のところで述べたように、伊勢崎の西を流れる今の広瀬川を本流としていたからである。だから東山道はその辺のどこかで利根川を横断するようになっていた。その日の夕方越後勢が利根の対岸から近づいて来たというのは、新田の庄の南から北上して来たということではなく、伊勢崎辺を東進して来たということなのである。新田軍は利根川を渡る前に、すでに守護代との戦いに勝っているのである。

それならばなぜ越後勢は越後から直ちに国府周辺に進まず、わざわざ東へやって来たのか。これに対する私の解釈はこうである。当時、一族はだいたいにおいて一つの戦闘単位を形成していた。一族は惣領を首将として、その指揮下に戦った。新田軍といい、足利軍といい、楠木軍といい、赤松軍といい、みな一族の結合の上に成立

した戦闘単位なのである。

惣領ということばは今でも生きているが、当時の惣領とは内容がだいぶ変っている。一族内における惣領の役割は時代とともに激しく変化しているので、その実態を捉ええることは容易ではないが、義貞の頃には、幕府は惣領を通じてその一族を支配していたようである。たとえば京都の大番や関東御公事などという軍役は惣領にその命を下し、惣領がそれを一族に割り当てたようである。経済についても、惣領は一族に分与した土地に対してなにかの権利を留保している例もあるということである。

越後勢はいつ時も早く新田軍の旗下に身を投じなければならなかったのである。里見氏や桃井氏がわざわざ遠方から新田へ来て出陣式に参加したのもそういう意味からであり、越後勢も何とかしてその式に参加したいと道を急いだのであろう。

14 外交戦

義貞は鎌倉の使者を斬ってしまったので、やぶれかぶれになって兵を挙げたのだという人がいる。人をバカにするのもいい加減にしろといいたくなる。それでは義貞はまるで新宿駅頭でバスに石油をまいて大勢の乗客を焼き殺した某と同然ではないか。しかも堂々たる歴史書にそう書いてあるから余計に腹が立つのである。

天下を狙う足利尊氏にとってどうしても片付けなければならぬ邪魔ものは新田義貞だった。彼は義貞の悪口を並べた奏状を天皇に奉り、義貞討伐の勅許を得たいと願い出た。太平記巻十四に「義貞は欲が深く、北条氏に金をとられるのがおしいので、その使者を斬

ってしまった。もうその罪をのがれることはできない。そのためにやぶれかぶれになって兵を挙げたのであり、朝敵を討つといっているが、実のところは、窮鼠かえって猫を噛み、闘雀人を辞せず（争っている雀は人間をも恐れない）に類するものだ」ということばがある。これはあくまでも喧嘩相手に浴びせかける罵倒のことばである。それを事実として考えようとする人の神経がわからない。

北条氏の命によって、楠木正成征伐のために河内（大阪府）に出陣していた義貞は、ひそかに北条氏討伐の志を抱き、執事船田入道善昌の奇計を用い、吉野山中に潜んでいた護良親王と連絡をつけ、その令旨を得て、北条氏には病氣と偽って故郷に帰った。使者を斬るよりはるか前の三月十一日のことである。それから兵を挙げるまでの約六十日、義貞はただ、刀を研ぎ、矢をはいているばかりではなかった。そこには熾烈な外交戦が展開されていたのである。蜂起の日取りも、合流する地点もおそらく打ち合わせ済みだったに相違ない。いくら義貞が愚将だからといって、蒼惶として僅か百五十騎で鎌倉を攻めることなどするはずはない。

この辺の消息については太平記に次の記事がある。どうして拳兵の事を知ったかと義貞に聞かれた大井田氏経は答えた。「去る五日、御使といって天狗山伏が一人、越後の国中を一日の間に馳せ廻ったので、夜を日に継いで馳せ参ったのであります。」

天狗山伏というものはどういうものか私には分からない。天狗のような格好をした山伏のことか、天狗のように足の早い山伏のことか、いずれにしても超能力者のことらしい。太平記作者はオカルト志向の強い人で、好んで怪力乱神を語っている。これもその一つかも知れない。当地（世良田）ではこれを安養寺明王院の不動明王だ

として、これを「新田触れ不動」といつている。あるいは明王院の山伏が使者として連絡に当たったのかも知れない。山伏が密使の役を勤めることはよくあったことで、これより少し前、藤原俊基が山伏になって諸国をめぐったことは人のよく知るところである。

しかし義貞がたった一人でこの大芝居を打ったとは考えられない。その背後には、大物——たとえば護良親王のような人——がいて、これを画策し、指導していたのではないだろうか。

小さな部隊が散発的に兵を挙げれば、いたずらに敵の餌食になるだけだという事ぐらい知らない武士があろうとは考えられない。甲州の武士が信濃路を経て西上州へやってきたのも新田軍に合流するためであつたろう。

15 出陣式

私はこれまで義貞が生品神社で兵を挙げたのを出陣式と書いて来た。があれははたして出陣式だったのであろうか。

木曾義仲は、京都へ攻め上る時、越中の国（富山県）砺波郡で神社のあるのに気がついた。聞いてみると八幡宮だという。義仲は全軍をとどめ、手書き（書記）の太夫房覚明に願書を書かせ、義仲はじめ重立った武将十三騎の上矢の鐙を添えて神前に奉った。⁽¹⁵⁾ 足利尊氏は、北条方から後醍醐方に寝返った時、京都の西丹波の国の篠村八幡の社前で旗を挙げた。かれも、その時、足壇妙玄に願書を書かせ、上差の鐙一筋を添えて神前に奉った。

武士は出陣の時には背中に簓という筒状の矢を差すものを背負い、その中に矢を二十四本差すことになっていた。矢は実戦用の征矢で

あつたが、一本は鐙矢といって孔のあいた蕪の形をしたものを差していた。この矢を射ると孔の中を空気が通って大きな音を立てる。戦争の時にはこの矢を射合うことによって戦闘開始の合図にした。これを上差しというのである。鐙矢を神前に捧げるといふ行為は、戦闘開始の合図が転化したものかも知れない。

ところが、義貞の挙兵の場合は「綸旨を披いて三度これを拝し」とあるだけで、それを神殿に納めたとも、鐙矢を添えたとも書いてない。いわば「神不在」の出陣式である。はたしてこれが出陣式だったのであろうか。首を傾げざるを得ない。現在、生品神社では五月八日に鐙矢祭というのを行い、鎌倉の方へ向けて矢を放つ儀式を行うが、太平記にはそんな記事はない。

16 生品神社と源氏

源氏の氏神は八幡宮である。だから木曾義仲も、足利尊氏も八幡社前で旗を挙げたのである。ちなみに、義仲は「義仲こそ何となう寄すると思ひたれば、幸に新八幡の御宝前に近付き奉って、合戦を既に遂げんとす」といつて八幡宮に戦勝を祈ると平家にある。⁽¹⁶⁾ このことばの意味は「義仲は何となく兵を挙げて別に出陣式をしなかったので、ここで改めて出陣式を行う」ということであろうと私は考える。

ここで生品神社について考えてみたい。生品神社は上野国神名帳（前橋市総社神社蔵）には「從三位 生階明神」とあり、これが今の生品神社であるとすれば、神名帳が成立したのは永仁六年（一二九八）であるから、生品神社はその時にすでにあったことになる。

したがって義貞の頃にもあったことは疑いない。祭神は『上野国志』には大己貴神おほなむちのかみとなつてゐる。大己貴神は大国主命おおくにぬしのみことの別名であつて、八幡様とは関係はない。

ところが同じ『上野国志』に小さい字で、次のような文が割註として挿入されている。

一説に生品社は平親王将門の弟御厨三郎将頼を祭る。将門伏誅の後、其靈崇をなす。依て将門を武州に祀りて神田明神と称し、将頼を上州に祭りて生品明神と称す。共に九月十九日を祭日として之を祭ると。生品旧縁起に見へたり。

尾島町大字出塚に大谷要太郎という人がいる。この人の家は代々生品神社の神主を勤めた家で、「上野国新田郡市野井郷、生品大明神之記」という一軸の巻物を秘蔵している。他見を許さないということであつたが、特に請うて見せていただいた。その全文は「尾島町の歴史」第四・五号（昭和四十九年一・二月）に発表してあるもので、ここでは割愛するが、私がこれを読んで驚いたのは、一般の縁起では祭神の徳をたたえるのが普通なのに、この本では将門も将頼も、あくまでも逆賊として描かれてゐることである。そしてその最後の方に、その悪霊がたたりをなして人々を苦しめるので、その鎮魂のために祀つたのだと記されてゐるのである。

平将門の弟御厨三郎将頼は兄将門の反逆にくみし、将門が下野の国府を占領し、国守藤原弘雅を追放したとき、兄から下野守に任命された。しかし将門の天下は長くは続かなかつた。それからわずか三か月後の天慶三年（九四〇）二月に

将門はこめ、かみよりぞ 斬られける
俵（田原）藤太が はかりごとにて⁽¹⁸⁾

と歌われたように、藤原秀郷ひでさとに討たれてしまった。将頼は相模の国まで逃げのびたが、秀郷の子千晴らに捕つて殺されてしまった。生品神社はその将頼を祭つた神社だという。とすると義貞が生品社前で旗をあげたという説にも疑問を抱かざるを得なくなる。これから朝家のために勤王の義軍をあげようとする人が、なぜ逆臣を祭る神社の前で兵をあげたのであろうか。そしてまた、戦いに敗れて悲惨な最期を遂げた将頼の神霊の前で、なぜめでたかるべき出陣式をあげたのであろうか。

すでに触れたが「生品大明神之記」には、将門や将頼を弁護することばは一つもない。徹頭徹尾、逆臣扱いである。そしてその最後の方で「その後残る凶徒悉く打従へ、東夷平均なりと云へ共、種々の怪異ありて国民穩やかならざれば、宣旨に従つて将門を神田明神として祝い、将頼を上野国生品の明神として祭る」と祭祀の理由を述べてゐる。敬うため、思慕するために将頼を祀つたのではないのである。

関東には将門や将頼を祀る神社が多い。これについて歴史家の中には、関東人の反骨精神がこれらの反逆行為に共鳴したからだとか説く人がいる。反抗史観の人々からいえば、これは都合のいい資料かも知れないが、実情はなかなかそんなことではないようである。

現在「新田義貞拳兵伝説地」として国から史跡の指定を受けてゐる新田町市野井の生品神社だけが生品神社ではない。上野七社生品神社といつて次のようにいくつもある。

- 1、藪塚本町 生品神社
- 2、笠懸村阿左美 同
- 3、太田市富沢 同
- 4、同市由良 合飯玉神社
- 5、深谷布高島 生品神社
- 6、同市中瀬 合十五社神社
- 7、市野井 生品神社

高島と中瀬は今は武州（埼玉県）に属しているが、かつては上野国に属していたのである。高島の人などは、昔は成田の不動尊へは参詣しなかったという。この不動尊は広沢の寛朝が、将門調伏のために京都の方から持って行って勧請したものだからである。

しかし神社には主神の交替という現象がある。神社は不変であっても、祭神が代わることがある。神社によっては隠居様という神を祀っているところもあるが、隠居様というのは主神の座を譲った神をいうのであろう。だから義貞の時代にも平将頼を祀っていたかどうかとなると何ともいえないのである。

東京の神田神社は、その縁起によると、義貞が兵を挙げた時から二十年ばかり後の、延文（南朝正平）年間、第三代の遊行上人真教が、将門を相殿として祀ったという。真教の年代にいささか解せないところがあるが、将門の死後すぐ祀ったのではないようである。同様の見地からすれば、生品神社も義貞が兵を挙げた当時は将門とは無縁だった可能性も大きい。したがって、「生品大明神之記」の記事をもって生品神社挙兵説を否定するのは早計である。

ちなみに、太平記には生品明神とあるだけで、どこの生品明神かということは書いてない。だから阿左見の生品神社などでは、ここ

で兵を挙げたのだと主張するのである。

しかしなお疑問が残る。源氏の氏神は八幡宮である。八幡宮は源氏の守護神である。その八幡で兵を挙げないで、なぜ縁もゆかりもない生品神社で兵を挙げたのかという疑問である。その付近に八幡宮がなかったというならまだ話はわかる。だが尾島町の岩松には、新田氏の曩祖が勧請したという岩松八幡宮がすであつたはずである。また義貞の曾祖父政氏は正元元年（一二五九）世良田に八幡宮を勧請し、その別当寺として普門寺を建立したと、天和元年の同寺の梵鐘には刻まれている。その八幡宮は江戸時代の末期に焼失し、神像と三代將軍家光が寄進したといわれる宮殿とが内陣西の間に安置されている。それらの由緒の正しさはともかく、源氏の嫡流を誇る新田氏が、その庄園内に八幡宮を勧請しなかったなどとは、どうしても考えられないのである。

これは全くの臆測にしか過ぎないが、生品神社に集結する前に、どこかの八幡宮で挙兵式を挙げたか、あるいは時間的な余裕がないので省略してしまったか、あるいは高崎の西の八幡庄の八幡宮で挙げたか、ひょっとすると高崎の南の山名の八幡宮で挙げたかなどということが考えられるのである。山名は義重の長男義範の食邑地であった。この辺の消息については信頼すべき史料を私は今のところ全く持っていない。

17 世良田に討出で

ここでまた問題になるのは梅松論の次の記事である。

新田左衛門佐義貞、君の味方として当国世良田に討出て陣をは
る。

この文の中の「世良田に」の「に」という格助詞をどう解釈するかということについて昔から大勢の人が頭を悩してきた。この「に」を方向を指示する格助詞とすれば、義貞は世良田の外のどこかに住んでいて、世良田へ出かけてきて、そこへ陣を張ったということになる。こういうところから義貞反町居住説が生まれたであろう。梅松論は生品神社については全く言及していないが、梅松論の右の記事に太平記の生品神社挙兵の記事を加えると、義貞は反町の館を出て生品社前で兵を挙げ、南へ下って世良田に陣を張ったという説が浮上する。とすると、義貞自身はよいとしても、南部の住人たちはだいたい無駄足を踏ませられたことになる。

また世良田へ陣を張るということは世良田を戦場とする危険を覚悟することである。妻子や老人その他の非戦闘員を戦火に捲きこむ恐れがある。陣を張るのはなるべく非戦闘員に損害が及ばないような場所にすべきではないであろうか。外から世良田へやって来てそこに陣を張るということは、世良田を「わが館のほとり」と呼んだ義貞のことばにも矛盾する。そこで吉田東伍博士は「に」は「を」の誤りではないかと考え、藤田精一氏は『新田氏研究』四五頁で次のように述べる。

「是に於て（生品前で兵を挙げて）、兵を笠懸野に観して、確
実に当時の官道（東山道―嘉津夫註）を扼し、上野国守護長崎
某を威圧し、（中略）軍を世良田に旋して軍容を整え、大義を

宣し、以て鎌倉討伐の師を発したりしなり」

これは、野球でいえば、投手が投球の姿勢を示して三塁の走者を牽制してから一塁へ投球するようなものである。三塁の走者の行動を一時的に抑止できても、アウトにするわけではない。三塁走者は依然として本塁をねらっている。球が一塁へ飛んでいるあいだに三塁走者が本塁を襲う可能性は依然として残っているのである。

私はここで、一つの試みとして国語学の立場からこの問題を考えてみたい。

「に」という格助詞はたしかに方向を指示する。「京に行く」といえば、「京へ行く」と同じことになる。「京へ、筑紫に、坂東さ」ということばがあつたさうである。方向を指示する格助詞を京都方面では「へ」とし、九州方面では「に」とし、関東方面では「さ」としたというのである。しかし「に」にはそれしか使い道がないのであろうか。

広辞苑の「に」の条を見ると「動作し作用する点をそこ指定する」のが第一義であつて、方向を指示したり、対象を指示したりするのは、第二義、第三義だとしている。そういえば「学校に学ぶ」といえば、学ぶ場所が学校であり、「家に隠る」といえば、隠れる場所が家だということである。つまり行動の行われる場所を指示するのである。この場合、「に」は「において」の省略形とも見られる。「世良田に討出て」というのは、討出るといふ行為が行われた場所が世良田であるというように理解してもいいのではあるまいか。また、これは広辞苑には書いてないが、「に」には「より」または「から」という意味もいく分か含まれているような気がしない。

もない。「法を栄朝に受く」といえば、仏法を栄朝から受けたことになり、「金を友人に借りる」といえば、友人から金を借りたことになるのである。

ここで気がついたことがあるので、脇道にそれるが少々述べてみたい。

田子の浦ゆ 打ち出でてみれば ま白にぞ
ふじの高嶺に 雪は降りける

これは万葉集に載せられた山部赤人の有名な和歌である。ところが鎌倉時代の藤原定家の撰といわれる小倉百人一首には、この歌が次のように改められている。

田子の浦に 打ち出でてみれば 白妙の
ふじの高嶺に 雪は降りつつ

「ま白にぞ」と「白妙の」の違いはまずいいとする。「雪は降りける」と「雪は降りつつ」もいいとする。しかし、「田子の浦ゆ」と「田子の浦に」では意味がだいぶ変わってくる。「ゆ」は「から」「より」を意味する。だから前者の場合、田子の浦からどこかへ出て富士山を眺めたことになる。後者の場合、どこからか田子の浦へ行って、そこから富士山を眺めたことになる。改作することは許されるとしても、意味を変えることまでがはたして許されるのであろうか。これは私が若い時から抱いていた疑問であった。それがこの「に」について考えているうちに、もし「に」に「より」という意味も含

まれているとすれば、定家はこの改作に何ら良心の痛みを感じる必要はなかったといえる——こんなことを私は考えたのである。はなはだ未熟な考えで人前に発表すべきものではないが、お笑い草にまで書いた次第である⁽¹⁹⁾。

「世良田に討出て陣を張る」という梅松論の文の中には、「討出て」と「陣を張る」という二つの動詞が含まれている。が、それらの動詞を限定する副詞句は「世良田に」ひとつしかない。

一方、太平記には「綸旨を拝し、笠懸野に討出ず」とあり、神明鏡には「宣旨を三度これを拝し、笠懸野に討出ず」とある。「討出ず」はいずれの場合にも「笠懸野に」という副詞句と結びついている。それに対し、梅松論には笠懸野への言及なしに「討出て」とある。いったいこれはどういうわけなのであろうか。笠懸野は義貞の挙兵とは無関係だったというのであろうか。太平記や神明鏡の記事は誤っているというのであろうか。

こう考えてみてはどうであらうか。もともと梅松論には「当国世良田に討出で、笠懸野に陣を張る」とあったが、書写を重ねているうちに、いつの間にか「笠懸野に」ということばが落ちてしまったのだと。このことばを補うことによって、初めてこの文は完結した文章になるのだと。

18 笠懸野

笠懸野は新田郡の北辺、藪塚や笠懸を中心とする大間々扇状地にあった。戦前あのあたりは一面平地林によって覆われ、一度迷いこむと出られないといわれたほどの密林地帯だった。それが戦中戦後

を通じて悉く伐採されたので、今では当時の景観を偲ぶことすらできないが、戦前までは一面平地林に覆われていたのである。

がそうした景観は太古の時代から続いていたのであろうか。この地は地下水が低く、水利に恵まれず、樹木もよく育たないような乾燥地帯だったように思われる。平地林に覆われるようになったのは、寛文年間（一六六一—一六七三）、代官岡上景能が渡良瀬川の水をひいて水利の便をはかって以来のことではないだろうか。それまではステップのように、木もろくに生えていない草原だったのではないかと思われる。だからこそ源頼朝が新田義重を新田館に訪問した時、ここで笠懸（騎射の式）を楽しんだので笠懸野と称するようになったという伝説も生まれたのであろう。

大間々扇状地は市野井の生品神社の北を東西に結ぶ線で終わる。扇状地の地下深くを潜流して来た地下水はこの線で噴出し、そこには金井、小金井、市野井、寺井、田部井などという湧水池を地名の起源とする村落が数珠玉のように東西に連なっているのである。東山道は原野を避け、笠懸野の南辺の湧水地帯を縫って下野の国へ入ったのであろう。では何故に義貞は原野へ討って出たのか。

関東武士の得意とする戦法は騎馬戦だった。最終的には組打ちになるにしても、戦争の主体は馬上からの「矢合わせ」だった。「坂東武者は平場の馳けを好む」といわれたが、騎馬戦の威力を発揮するには平地が適していたからである。馬上で矢を射る場合、サウスポーでない限り、馬手（右手）の方向へ矢を放つことはできない⁽²⁰⁾。だから敵の馬手に出ようとして馬を疾駆させる。騎馬戦は機動力に勝れた駿馬を必要とするが、関東は名馬の産地で、関東武士は優秀な馬に恵まれていた。そしてその機動力を存分に発揮するためには、

広々とした、馬の足にかかるもののない平原を必要とした。だから鎌倉時代に行われた戦闘はほとんど平地戦である。現に義貞が北条軍と戦った戦場——入間川、久米川、分倍河原、いずれも平原である。

また鎌倉時代は兵と農は完全に分離していたわけではなく、当時の武士はまだ耕作者あるいは農園経営者としての色彩を帯びていたのである。兵農が完全に分離され、武士が土の感触を忘れた純粋な消費者になるのは、それから二百五十年の後、豊臣秀吉の刀狩りを待たなければならなかった。

地頭は読んで字の如く現地の庄園管理者である。と同時に「門田」⁽²¹⁾などといわれた直営農場の経営者でもあった。したがって地頭——地頭が庄園を遠方に持っている場合は地頭代——は現地から離れることはできなかった。山の上に城を築いてその中にこもってしまふことなどは一般にあり得なかったことである。

楠木正成の赤坂城や千早城が数十倍に及ぶ関東勢を以ってしてもなかなか落せなかったのも、関東勢が山岳戦に不馴れだったことが理由のひとつではなかったかと考えられる。この戦争でも、関東勢は楠木勢を「馬の足立てのいい所」へおびき出して、得意の騎馬戦に持込もうとしたが、楠木勢はその手には乗って来なかったのである。

義貞が笠懸野に討ち出たのは、ここを戦場にして守護代の軍勢と一戦を交えるか、敵軍の来襲が遅ければ、ここを出発点として東山道を西進し、遭遇戦を展開するか、敵軍が守護館に籠もっていたら、一挙にこれを覆滅するか、義貞はこんな作戦計画を立てていたのではないだろうか。

これより二十年ばかり後の正平六年（北朝観応二年）にこの笠懸野が戦場になったことがある。足利尊氏と弟直義が戦ったいわゆる観応の擾乱の時である。尊氏が駿河国の薩埵峠に陣を張ったとき、下野国の宇都宮氏綱は尊氏に味方するために上野国を通過した。赤城南麓の住人、大胡、山上らの人々が宇都宮に後れをとるまいと、新田一族の大島某を大将にして笠懸野へ討って出た。直義方の上野国の守護上杉憲顕の家臣で世良田に駐在していた長尾孫六と長尾平三が直ちに笠懸野へ駆けつけ、合戦となり、大島方は大敗して四分五裂し、逃亡した。

今の笠懸村、藪塚本村の繁栄ぶりを知っている人にとっては、いかに六百五十年前とはいえ、ここが木も生えていない一面の草原だったなどとは信じられないかも知れない。そうした人々のために、同じ太平記にあるこの事件に続く那和合戦の記事を紹介しておこう。大胡、山上らの軽拳に眉をひそめながら、宇都宮氏綱の軍勢は利根川を渡って那和の庄へ出た。前述のとおり、当時の利根川は今の広瀬川の川筋を流れ、那和の庄はその右岸（西）にあった。周知のことではあるが今の佐波郡は、明治二十九年広瀬川（旧利根川）右岸の名波（那波）郡と、左岸の佐位郡が合併してできた郡である。宇都宮勢が那和の庄へ着くと、これを追尾して来た直義方の桃井直常の軍勢との間に、一大野戦が展開された。この戦いは宇都宮の勝利に帰するが、太平記は那和の庄の景観を「あくまでも広き平野の馬の足にかかる草木も一本もなき処にて」とか「平々たる野原」などと描写している。

那和合戦の戦場が今のどの辺にあたるか私にはわからない。いずれにしても今の伊勢崎市の南部地区には相違ない。今の殷賑を極め

たあの地方の状態からはとても想像はできないが、太平記にはそのように描かれているのである。近くを利根川が流れ、水利の便には比較的恵まれていたと思われるこの地方でもこんな状態であったとすれば、水利に乏しい笠懸野がどんな様子だったか、思いなかばに過ぎるものがあるだろう。

19 武蔵野の交通事情

新田軍は八幡から武蔵国へ進んだ。武蔵野は今でこそ舗装道路が四通八達し、橋梁は至る処で河川を横断し、人家や工場が碁石のように敷き詰められている。が今から六百五十年前の武蔵野ははたしどうだったであろうか。

そのときより三百年ばかり前に書かれた更級日記には「あしおぎのみ高く生いて、馬に乗りて弓もたる末見えぬまで高く生いしげりて」と記されている。またそのときより三百年ばかり後に書かれた丙辰紀行には「そこばくの蒼莽を過ぎて又蒼莽なり」とある。⁽²²⁾ 蒼莽とは草原のことである。武蔵野は一面の草原だったのである。

しかし、だんだん平地林が広がり始めたようである。埼玉県には今でも平地林が多いが、昔はもっと多かつたらしく、岡部、深谷、熊谷などの南の広大な土地は櫛引野⁽²³⁾といわれ、平地林に覆われていたという。関越自動車道の沿線にある森林公園などはその名残りであろう。

畠山重忠の館跡と称する菅谷（埼玉県）の南の林の中に、鎌倉街道といわれる道が残っている。行ってみると、道はくねくねと曲り、狭く、馬が二頭も横に並べばはみ出してしまいうくらいである。私た

ちが子供の時、木崎駅（群馬県）の北方一面は木崎山と呼ばれた平地林で、その中の道は「けもの道」といわれるにふさわしいほど曲がりくねった細い道で、その上草が生い茂っていて、自転車も一列にならなければならないことはできなかった。菅谷の鎌倉街道もそれと似たような道だった。

地図の上で、直線距離を測ってみても、それだけで遠近をいうことはできない。生品神社から南下するのが鎌倉への最短距離だときめこむのも早計である。橋や舟があまりなかった頃の旅人は、川があるとその上流へ行き、川幅が狭くなったり、水量が少なくなった所で川を渡り、また下流へ下って旅を続けたという。この意味においても、諸川の上流である秩父山麓を通った方が楽だったように思うがどんなものであろうか。

現在、武蔵野と呼ばれるところ——東京都、埼玉県、神奈川県の一部——は、東の方ほど開け、人口密度が大きくなるが、文明の黎明期にはむしろその逆だったのである。文明は西の山麓地方から東の平野部の下って来た。水田耕作は、山から湧き出る水を「かけ流し」にできる山麓の方に早く開け、灌漑技術の発達とともに平野に広がったのである。道路も古いものは標高の高いところにある。義貞の時代には武蔵野のご真中よりも、むしろ秩父山麓の方が、道路事情がよかったのである。そして、秩父山麓の道が上野、信濃、越後の国府を繋いでいたという政治的な理由がこれに加われば、西進説の蓋然性はますます大きくなるのである。

あとがき

常識に挑戦することは容易なわざではない。誰だって今まで信じていたことが誤りだなどといわれれば腹が立つにきまっている。いわんやこれが郷土の歴史ということになれば事はいよいよ面倒である。お互に郷土に対する誇りのようなものを持っている。もしそれを傷けられるような事になれば面白くないと思うのは人情である。私の主張はあまり実害はないと思うが、それでも親しい友人のいく人かを失わなければならないかも知れない。

しかし私は、私の説が絶対に正しいなどと主張しているわけではない。これは誤りかも知れず、そうとわかればいつでも撤回するつもりである。

私はかつて雑誌『上州路』に西進説を小説風に書いたことがある。しかし少しの反応もなかった。黙殺されてしまったのである。昨年五月七日「新田義貞に関するシンポジウム」が新田町体育館で開かれた。私もパネラーとして出席したが、最後の質疑応答の時間に「何故北方の生品で兵を挙げたのか」という質問が出た。司会者が私を回答者として指名したので、やむを得ず私の説を述べた。全く準備がないので私の説明は支離滅裂だった。その時から私はいつか一度秩序だって書いてみなければならぬと心にきめた。この一文がその結果であるが、勿々の間に仕上げたので、甚だ非論理的で、まことにお恥かしい次第である。（完）

註

- (1) 井田晃作「新田義貞、鎌倉攻め勢揃い『八幡庄』は八幡原か『上野・武蔵の古道』視点に立って——」(群馬県史研究、25号、昭和62年3月)、七三頁。飯倉晴武「鎌倉討幕への道程」(太田市史・通史編・中世、平成9年発行)、三一五頁。峰岸氏の西進説はつぎの論著に見られる。『群馬県の歴史』(昭和49年、山川出版社)七六頁。『新田町誌』第四卷(特集編・新田荘と新田氏)、昭和59年10月。
- (2) 太平記に記されている地名は「小幡」である。神明鏡には「八幡」とある。以下にも論じられるように、「小幡」は「八幡」の誤りと見ておく。
- (3) 吉田東伍『増補大日本地名辞書』坂東、昭和45年、富山房、八四〇下および八四〇上。
- (4) 太平記のどの版もこの字を用いている。修は漢和辞典によれば音は「シ」、訓は「たのむ(侍)」である。しかし、太平記はこれを夥(おびただしい)の義で用いている。太平記のいくつかの版には修に「ヲビタ」とルビがふってあり、慶安三年(一六五〇)の太平記(雄松堂フィルム出版、古写本総覧)では漢字でなく変体仮名で「おひたたく」とある。
- (5) 藤田精一『新田氏研究』大正七年、千々和実『新田義貞公根本史料』昭和十七年、附図、佐藤和彦『南北朝内乱』一九七四、地図(三四頁)、は南下説を示している。
- (6) 世良田村は昭和三十二年の町村合併に際し二分し、東部は東隣の尾島町に、西部は西隣の境町に編入された。世良田村の中心部であった大字世良田は尾島町に編入された。
- (7) 江戸時代、村方から領主・代官に提出した村の概要を記した帳簿。(吉川弘文館『国史大辞典』〈村明細帳〉)
- (8) 毛呂権蔵『上野国志』安永三年筆、明治四十三年刊行、環水堂(世良田村)、二十三頁。
- (9) 一説にいう、義貞軍の一部は西進したかも知れないが、義貞自身は南下した、と。しかし古態本太平記の「小幡庄ニテ追付奉ル」という敬語を含む表現は義貞に追い付いたことを意味すると思われる。南下した軍があるとすれば、むしろ別動隊のほうであろう。
- (10) 『鎌倉市史』史料編2、一三〇—一三二頁。『神奈川県史』資料編3(古代・中世)四七九頁。
- (11) 世良田から東京へ出るには東武線で世良田駅から東に向う。
- (12) 「利根川は古くからたびたび変流した。県庁裏を流れる現在の流路は、室町末期の天文年間以後のもので、天文八年・同十二年の大洪水で現在の流路に自然変流したものと考えられている。それ以前は、前橋市北部の橘山の南から南東方向に流れ、前橋市内を貫流していた。現在の桃ノ木川筋を流れ、その後現在の広瀬川筋を流れ、比刀禰(ひとね)川とも呼ばれていた。」(角川書店『日本地名大辞典』群馬県、六五六頁)
- (13) 『源平盛衰記』卷二七、〈信濃横田川原軍事〉。「上田越え」については吉田東伍『大日本地名辞書』卷五、二二四頁上。「関山越え」については、同、二〇八頁上—中、参照。
- (14) 太平記によれば、義貞は五月八日卯の刻(午前六時)に生品神社で挙兵し、笠懸野辺へ打出たが、その勢わずか百五十騎たらずであった。ところが、その日の晩景に戸称(利根)の方より越後からの援軍二千余騎が馬烟を立てて馳来ったという。嘉津夫の考えでは、「卯の刻」と「晩景」の間に利根川(いまの広瀬川)の東(笠懸野か伊勢崎近傍)で義貞軍と長崎軍の合戦があり、長崎軍が撤退し、義貞軍が利根川に向おうとしているときに、越後勢が川を渡って馳来ったということになる。太平記にはこの辺のことについて詳細は述べられていない。ちなみに井田氏は新田軍の勢揃いの場所である「八幡庄」として、「利根川ノ方ヨリ越後勢ノ馬煙」が視野に入る地点でなければならないという前提で、山名八幡宮、八幡原、角淵八幡宮の三候補のうち、八幡原がふさわしいと論じているが、この前提には問題がある。太平記は越後の先陣が馬煙を立てて到来したことを「八幡」に関連させて述べているのではないからである。むしろ、越後の先陣(先着隊)と後陣とは義貞軍に合流した地点を異に

するように思われる。「追い付いた」という表現がそれを示唆するし、もし同じなら、先陣の合流時に小幡の名が記されてしかるべきなのに、そうされていない。また井田氏は太平記の利根川を現在の利根川と考えているが、これに問題はないだろうか。太平記卷三十には、下野を出発した宇都宮軍が利根川を渡つて那和庄に着いたと記されているが、井田氏はこれをどう解釈するのだろうか。峰岸純夫氏は『新田町誌』（注1参照）で義貞軍は「利根川の渡河点（前橋市）の手前で、利根川を渡つて来た越後の先発隊」と合流したといっている。峰岸氏も現在の利根川を考えたように思われる。氏は「元弘三年五月、上野国新田庄における二つの討幕蜂起」（小川信先生古稀記念論集『日本中世政治社会の研究』、続群書類従完成会、平成三年、所収）で同じ言葉をくりかえしているが、これには地図が添えられている。そこでは現利根川とは別に、広瀬川と覚しき川に「利根川（当時）」という文字が記されている。氏がいう「利根川」とはこちらをいうのであろうか。それならなぜ文中でそのことに触れないのであろうか。

(15) 原文は「有忿鷄肋之貪心」。嘉津夫は一般の解釈にしたがっているが、上横手雅敬氏（京大教授）はこれを「義貞が北条氏の貪欲さに立腹した」の意に解する。本論冒頭の文献(3)の二八頁。

(16) 『平家物語』巻七、へ木曾願書。

(17) 梶原正昭校注『平家物語』桜楓社、昭和五十九年、四一一頁。

この校注の底本は早稲田大学図書館蔵・元和七年刊、『平家物語』〈流布本〉である。「何となう寄すると思ひたれば」の句は長門本、南都本、延慶本などにはない。

(18) 『太平記』巻一六

(19) 荀子の「青、取之於藍、而青於藍」は「青は藍より出でて（直訳「青、これを藍より取りて」）藍よりも青し」と訳されている。

「於」は「より」と訳されている。梅松論の著者は漢文に馴れていて「に」を「より」の意味で用いた可能性があろう。太平記には宇都宮軍が「都合其勢千五百騎、十六日午剋二、下野国天命宿二打出

タリ」（『太平記』三、日本古典文学全集、岩波書店、一五八頁）とあるが、「二打出タリ」は「から出発した」を意味しているようである。また、「○○に勝る」は「○○より勝る」ともいう。

(20) 手綱を取る手（通常右手）を馬手（めて）という。弓を持つ手を弓手（ゆんで、左手）という。騎兵は矢を射る場合、馬手で矢筈（やはず）を弓弦（ゆずる）につがえたのだろう。（古い絵を見ると、手綱はこのとき馬のたてがみに引っかけてある。）このような姿勢で射れば、矢の飛ぶ方向は必然的に左方になる。テレビで見る戦国時代の合戦では武士は左手で手綱を取り、右手で剣を振るっていた。（21）中世の武士の居館の周辺部に広がる付属耕地。年貢が免除された。（吉川弘文館『国史大辞典』へもんでん・もんばた）

(22) 「名におふむさし野は、月の入るべき山もなしといへば、まことにくさばくの蒼莽をすぎて又蒼莽なり、此国の稻毛、葛西、越谷、岩筑、河越、鴻巣、忍（おし）なども、皆むさし野の内にて侍る。

いづれも御獵場なれば、毎年爰（ここ）にならせ給ふ。」（林道春『羅山』『丙辰紀行』、塚本哲三編『日記紀行集』有朋堂文庫、昭和二年、一六九頁）

(23) 樹木が櫛の葉のように密生した野の意か。広辞苑によれば「櫛の歯を挽く」は物事が頻繁に引続いて絶えないたとえであり、「挽く」は「切り割る」ことである。

(24) 嘉津夫は文献(2)の「あとがき」で「常識と一致しないので、納得を得られることは容易ではあるまいが」と書き、文献(3)では司会者の唐沢定市氏（群馬県教育委員会・県史編纂室参事）が嘉津夫の説を「非常にユニークな御意見」と評し、しかも(2)には南進説を示す千々和実氏の地図が掲載してある。しかし、文献(2)(3)の時点ではすでに峰岸氏の西進説が世に現れていた（注1参照）。

なお、私の弟（文夫）からつぎの二つの情報が寄せられた。（一）小暮季夫編『武蔵国児玉郡誌』昭和二年（復刻版、昭和六十二年、臨川書店）四八〇頁に、明治四十五年四月陽雲寺住職武田正樹の記

す『勤王家畑六郎左衛門尉時能首塚の事由』の文が引用され、その中につきの記事がある。文中、金窪は本庄の西北に位置する集落である。「(時能は)元弘三年公(＝義貞)鎌倉追討の時、公時能をして武蔵国賀美郡(今の児玉郡)金窪太瑯城の城代として、上武両国界の鎮撫を命ぜらる、時能満願寺(今の陽雲寺)を以て畑氏の香花院となす、公同城に宿陣し、新田家尊信の不動尊を当寺に奉安して、戦勝を祈る、公又出陣に際し、城側にある稲荷神社に於て陣備をなす。依て同社を陣開稻荷と云ふ。」(二)篠木弘明著『境風土記』昭和四十四年、七十三頁に、境町伊与久の雷電神社をめぐるつぎの記事がある。「元弘三年新田義貞は鎌倉討伐の兵を挙げると、雷電神社に戦勝を祈念した。」この二つの記事は西進説に有利であろう。

Yoshisada's Route for Attacking Kamakura

Akira SADAKATA

Nitta Yoshisada put an end to the Kamakura Shogunate in 1333. According to the chronicle *Taiheiki*, he started from the Ikushina shrine in the Gumma-prefecture. It is generally supposed that he marched directly southward, because that is the shortest way to Kamakura.

In fact there are several local traditions in the areas to the southward of the Ikushina shrine. One tradition says that Yoshisada crossed the Tone-River at such and such a place and that there still exists a pine-tree to which Yoshisada attached the rope of his boat. Another tradition says that Yoshisada climbed a pine-tree to watch the camp of his enemy and that the pine-tree still exists.

Recently, however, a new theory appeared according to which Yoshisada marched westward at first from the Ikushina shrine and, arriving at Yawata (near Takasaki city), he joined with allied armies and then marched southward.

When we accept this theory, we can solve some important riddles and get a better understanding of the political situations of the epoch. This article has the aim of making known this theory.